

ディケンズとジェンダー

——家父長制神話の崩壊とディケンズの限定的理解——

吉 田 一 穂

序

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の作品をジェンダーの観点から考えるとき、気づかざるを得ないことがある。それは、ディケンズが家父長制神話の崩壊を描きながらも、男女同権を主張するような女性を描ききれていないことである。*Jane Eyre* (1847) のヒロインであるジェイン (Jane) と *Vanity Fair* (1847-48) のベッキー・シャープ (Becky Sharp) は、ガヴァネスとなり自力で社会を渡っていこうとするが、このように自立心を持ち力強く生きていく女性がディケンズの作品には少ない。それでは、完全に男性に依存して生きていく女性ばかりなのかというとそうではない。

例えば、*Little Dorrit* (1857) の若い未婚女性の教育者ジェネラル (General) 夫人は、自身の職業によって生計を立てている。彼女は、45歳で60歳の兵站部将校と結婚したが、夫の死後、自分の資産が少なかったので、良家の若い子女の精神教育と礼儀作法訓練をすることにする。彼女は、名門のやもめ男に14歳の娘の精神教育と礼儀作法訓練を頼まれ、7年間その仕事に従事し、その間ヨーロッパ旅行をして文化的教養の持ち主たる者が

キーワード：ジェンダー，家父長制神話，男性優位主義，女性の権利，女性の解放

見る必要がある様々な物を見て回る。娘もやもめ男も結婚し、役目が終わったので、ジェネラル夫人は折りよく申し出たウィリアム・ドリット (William Dorrit) に年額400ポンドで雇われ、彼の娘たちの教育係となる。

このことにより、ジェネラル夫人が自分の稼ぎにより生計を立てていることは明らかである。また、エイミーからアーサーに宛てた手紙の中で、ジェネラル夫人がフランス語やイタリア語の指導をしていることを述べていることから、彼女が莫大な財産の法廷相続人になったウィリアムの娘の教育係としてふさわしい教養の持ち主であることが解る。

しかし、ジェネラル夫人が小説のヒロインでないということに我々は注目しなければならない。作家の思想はヒロインの生き方に反映される場合が多いことから、我々はエイミーに目を向ける必要がある。*Little Dorrit* で、ひたすら父親思いのエイミーは、マーシャルシー (Marshalsea) 監獄から出た後、父親の意に沿うように生きようとするが、父親がマードル (Merdle) 夫人の夕食会でマーシャルシー監獄で生活していたときのアイデンティティに逆戻りすることにより、家父長制神話の崩壊に直面する。

家父長制神話の崩壊は、*Little Dorrit* だけでなく、すでに *Dombey and Son* (1848) と *Hard Times* (1854) にも見られる。その崩壊の過程においてある共通の要素が見られる。それは、ディケンズが父親と娘の関係において、人間の自然な状態の重要性を訴えているということだ。当然その人間の自然な状態の重要性の中には女性の自然な状態の重要性も含まれていることから、フェミニズムの先駆け的意味合いもあるわけだが、ディケンズは多くの女性たちを家庭を顧みてしかるべきであるという考えの元で描き出している。その境界線が色濃く現れているのが *Bleak House* (1853) である。

本論文では、*Dombey and Son* と *Hard Times* における家父長制神話の崩壊を考慮した後、*Bleak House* でどのような境界線が見られるかを考えて

いきたい。

1. *Dombey and Son* と *Hard Times* における 家父長制神話の崩壊

まず *Dombey and Son* における家父長制神話の崩壊について見ていきたい。この作品において顕著なことは、ドンビー (Dombey) 氏が社会的価値を家庭に持ち込むことによってもたらされる弊害である。フィリップ・ホブスバウム (Philip Hobsbaum) が「*Dombey and Son* は、ビジネスというよりも家族関係についての作品である」(Hobsbaum 110) と述べているように、作品はドンビー氏がビジネスを家庭に持ち込むことにより、家族関係、特に父親と娘の関係に支障を来す物語である。

ポール・デイヴィス (Paul Davis) が指摘しているように、祖父と父親から商会を引き継いだドンビー氏は、「17世紀と18世紀の重商主義の時代を表している人物」である (Davis 142)。また、アンドルー・サンダーズ (Andrew Sanders) が指摘しているように、「ドンビー氏は19世紀初期の営利主義の価値体系の代表者であり、金持ちで商売の世界で傑出していることを誇りにしている男」である (Sanders 122)。ドンビー氏にとって一番重要なことは、代々引き継がれてきた商会を確実に次世代に引き継がせることであった。もちろん引き継ぐ人間は彼の息子であり、娘は商会にとって全く関係のない存在なのだ。ディケンズが説明しているように、ドンビー氏は娘に嫌悪を抱いていないが、生まれたときから彼女に対して否定的なのである。それは、娘が商会を引き継ぐわけではないという彼の気持ちからきている。その気持ちは、息子のポール (Paul) が生まれてからますます強くなる。ドンビー氏は、姉のルイーザ (Louisa) に「ポールの幼少期が順調に過ぎ、彼が一刻も早く生まれながらにあてがわれたポストにふさわしい人間に成長してくれさえすれば、ぼくに文句はありません。後はあ

いつが好きなように有力者の知遇を得ればいい」(46)¹⁾、「誰もぼくと息子の間に割って入ってはしくないんです」(46)と言う。ドンビー氏の言葉は、ドンビー父子商会に娘は不要であることを暗示している。ルイーザもまた、「フローレンス (Florence) はきっすいのドンビーにはなれっこありませんからね、たとえ千年生きながらえたって」(48)と言うことにより、ドンビー氏の考えを肯定している。すなわち、ドンビー氏の家庭では、男性の長子相続が当然であることから、男性優位主義的な価値観が支配的であると言える。

ポールの死後もドンビー氏は、娘に対する態度を変えない。彼はプライドのゆえに、また金で買えるイーディス (Edith) の身分と美しさのゆえに、さらにイーディスが別の息子を産んでくれるかもしれないがゆえに、イーディスと結婚する (Fielding 59)。しかし、イーディスはドンビー氏の期待を裏切り、結婚記念日にカーカー (Carker) と駆け落ちする。フローレンスは、父親を哀れに思い、今までの拒絶も恐れることなく駆け寄るが、ドンビー氏は残酷にも腕で彼女を斜めに打ち払う。父親の冷酷と無視に耐えてきたフローレンスであったが、彼女は自分にとって父親はもはやいないと考え、屋敷を飛び出す。

イーディスにも娘にも逃げられたドンビー氏は、商会の破産に直面する。ドンビー氏は自ら破産に直面し、ようやく拒まれ、打ち捨てられた娘の気持ちを知る。ドンビー氏は悲嘆と悔悛に打ちひしがれるが、彼を救ったのは戻ってきた娘であった。フローレンスはドンビー氏に祈りを捧げ、「パパ！ いとしいパパ！ ごめんなさい、どうか私を赦して！ 私、こうしてひざまずいて赦しを請うために戻ってきたの。こうでもしなければ、もう二度と幸せにはなれないわ！」(843)と言う。ドンビー氏は、娘が変わっていない、自分に赦しを請う姿を見る。フローレンスは自ら赦しを請うことにより、かつて冷酷だった父親を赦していることとなる。すなわち、家父

長制が崩壊した今となつては、ドンビー氏にとってフローレンス以外に救いはないのだ。家庭に慰安を与え、やさしく、害をもたさず、慎み深く、受動的で感じのよい、ヴィクトリア朝時代の理想的女性フローレンスが家庭を飛び出すことは、フェミニズムの先駆けとしての行動ととらえることができる。しかし、フローレンスは、父親に赦しを請うことにより、依然としてヴィクトリア朝時代の理想的女性であり続ける。一方で、社会的価値を重んじる自己を保ったまま硬直化したドンビー氏は、フローレンスによって救われることにより人間の自然な状態に目覚める。このことにより、フローレンスの役割は、ドンビー氏を救い彼の自然を回復させる役割だと言える。

次に *Hard Times* について考えてみたい。*Hard Times* において産業社会と教育の問題は、作品と密接に関係していて、ディケンズは、グラッドグラインド (Gradgrind) 家の親子関係を通してそれらの問題を明確に読者に提示している。作品において特に注目に値するのは、*Dombey and Son* の場合と同様に父親と娘の関係である。アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) が指摘しているように、ルイーザ (Louisa) は生まれると同時に、父親の事実主義の教育によって人生を奪われた女性であり、あまりにも早くから、几帳面で物質万能の人生観を強いられ、父親の意志と弟に対する物質面の支援のために結婚する (Wilson 238)。ルイーザには、事実主義の教育を肯定も否定もする余地がなく、彼女は、いわば押しつけられた形で事実主義を受け入れるが、時の経過とともに事実主義に対するアンビヴァレンスがめばえる。彼女のアンビヴァレンスは、父親の価値観を受け入れるかどうかについての反対感情両立と言ってもいい。*Hard Times* において、トマス・グラッドグラインド (Thomas Gradgrind) 氏は、自身のことを「現実主義者」、「事実と計算を重んじる人間」(3)と説明し²⁾、子供を事実主義の教育で管理し、空想を禁じる。エドガー・ジョンソン (Edgar

Johnson) が指摘しているように、グラッドグラインド氏の学校を支配する原理は、コークタウン (Coketown) とその産業を支配する原理であるが、グラッドグラインド氏の事実一辺倒の哲学は、ヴィクトリア朝時代の実利主義の非人間的な精神の一表現である (Johnson 809)。たとえ不快なものであったとしても、事実一辺倒の哲学は、グラッドグラインド氏にとって信頼できるものであり、公平無私なものである。このような哲学に基づいてルーザーは育てられる。それは、グラッドグラインド氏の学校を支配する哲学でもあることから、グラッドグラインド氏は家庭に自分の信奉する哲学を持ち込んでいることになる。グラッドグラインド氏の信奉する事実一辺倒の哲学には、彼の社会的立場が密接に関係している。

Hard Times において、学校経営者グラッドグラインド氏は、工場経営者バウンダビー (Bounderby) 氏と同じ中産階級に属する。それゆえに、階級のことを考えると、グラッドグラインド氏は、将来産業のリーダーないしはその妻として自身の子供たちに事実による管理をさせるために空想を禁じたと言える。ルーザーが弟に「トム、私、不思議に思うのだけど」(49)と言っているのを立ち聞きしたグラッドグラインド氏は、「ルーザー、決して不思議に思ったりしてはならない！」(49)と言う。ディケンズは、「この言葉にこそ理性を教育するための機械的技術と奥義の源が存在した。感情や愛情の育成に身を屈してはならない。決して不思議に思ったりしてはならないのだ」(49)と説明している。感情や愛情の育成に身を屈することは、人生を誤らせるもととなるのだ。

すなわち、空想、感情、愛情は産業社会を支える事実中心主義によって無視されてきたのである。第1巻第15章「父親と娘」において、グラッドグラインド氏は、結婚に関しても事実を持ち出し、バウンダビー氏が50歳でルーザーが20歳で年齢が離れているが、イングランドとウェールズの統計数字から結婚の大部分が年齢のひどく離れた者の間で行われていること

から、バウンダビー氏とルイーザの結婚に問題はないと言う。ルイーザは、バウンダビー氏の申し込みを受け入れると父親に伝えるが、そうせざるを得ない経緯を説明している。ルイーザは、「好みや空想，熱情や愛情についてこの私がどんなことを知っていると言うのですか？」，「説明できる問題，把握できる現実からどうやって逃げ出すことができたでしょう？」(101)と言う。彼女の言葉は，ルイーザが父親の押しつける価値観により生きなければならなかったことを示している。ルイーザは家父長制の秩序の中，父親の押しつける価値観の元で生き，政略結婚さえ受け入れざるを得なくなるのだ。

バウンダビー氏との結婚は，順当にいくと彼女自身の中産階級としての安定した生活と弟の出世を約束するはずであった。しかしながら，ルイーザは自身の自然な状態に逆らいがたく，バウンダビー氏との生活を捨てる。折しもルイーザはハートハウスに誘惑され，父親のところへ逃れる。彼女がはっきりと父親の教育に対して反発を表現するのはこのときである。ルイーザは，「分かっていることはただ，お父様の哲学やお父様の教育では，私を救えないということです」(219)と言う。ルイーザの言葉は，彼女が無視しようとしてきた自然を無視できなくなってきたことを示している。

娘の状態を見たグラッドグラインド氏は，「人によれば，頭の知恵と心の知恵というものがあると考えていよう。わしはそう思っていなかった。だが，今も言ったように自信がないんだ。頭脳こそ全能だと思っていた。しかし，そうでないのかもしれない。今朝になって頭脳が全能などどうして言えよう」(223)と言う。これは，娘の結婚の失敗を目の当たりにしたグラッドグラインド氏が自身の価値観の誤りをはからずも告白した瞬間である。このことから，*Hard Times* におけるルイーザの役割は，人間の自然を無視した父親の教育方針の誤りを指摘する役割だと言える。

Dombey and Son においても *Hard Times* においても，ディケンズは，

家父長制神話の崩壊を描いている。このことは、女性の権利にディケンズが理解を示しているかのような印象を与えるが、その理解はあくまで限定的なものに留まる。女性の社会進出を全肯定するには至っていない。その理由が見られる作品が *Bleak House* である。次に *Bleak House* について考えてみたい。

2. *Bleak House* に見られるディケンズの境界線

Bleak House においてディケンズは、家庭の中にのみ留まらない女性を描き出している。その女性とは、ジェリビー (Jellyby) 夫人である。第4章「望遠鏡的博愛」(‘Telescopic Philanthropy’) でディケンズは、ジェリビー夫人が自分の周囲のことには気づかず、遠くのことばかり見ていることを描写している。彼女は、ニジェール (Niger) 河の左岸で、150から200ほどの健全な家庭にコーヒーを栽培させ、ボリオブーラ・ガー (Borrioboola-Gha) の現地の人たちを教育させることを望んでいる。

Bleak House が出版される10年前、ファウエル・バクストン (Fowell Buxton, 1786-1845) によって管理されたアフリカ文明化協会 (African Civilization Society) とニジェール協会 (Niger Association) は、無謀な遠征を企画した。アルバート (Albert) とウィルバーフォース (Wilberforce) という名前の二隻を含む三隻の蒸気船がアフリカに向けて出港した。目的は、北部ニジェールとの貿易を開始することと、キリスト教の教化の中心地を確立することであった。この計画に関しては、多くの人が風邪で死んだので、全ての企てが一年以内に断念され、最終的には失敗に終わった。遠征に関するバクストンの主な目的は、合法的な商業によりアフリカ人を奴隷貿易から守ることであった (House 87)。

このバクストンによって計画された遠征がジェリビー夫人が没頭するアフリカ開発計画のモデルとなっていると考えられる。ジェリビー夫人は、

アフリカ計画に没頭するあまり、家庭を無視し、子供を無視している。第4章でエスタたちがジェリビー夫人の前に出るとき、子供たちの一人が大きな音を立てて階段から落ちる。その際のジェリビー夫人の様子をディケンズは、次のように描写している。

Mrs. Jellyby, whose face reflected none of the uneasiness which we could not help showing in our own faces, as the dear child's head recorded its passage with a bump on every stair—Richard afterwards said he counted seven, besides one for the landing—received us with perfect equanimity. She was a pretty, very diminutive, plump woman, of from forty to fifty, with handsome eyes, though they had a curious habit of seeming to look a long way off. As if—I am quoting Richard again—they could see nothing nearer than Africa! (36)³⁾

かわいい子供の顔が一段ごとにドシンドシンと墜落を告げるので——踊り場の音を別にしても7回音が聞こえたとリチャードがあとで言いました——私たちは顔に不安の念をあらわさずにはいられませんでしたが、ジェリビー夫人はその気配も示さず、平静そのもののようには私たちが迎えるのでした。40歳から50歳のあいだの、とても小柄で肉づきのよい、きれいな人で、その目は美しいけれども、はるか遠いところを眺めているように見える奇妙な癖のある目でした。まるで——またリチャードの言葉を使いますが——アフリカより近いところにあるものはすべて見えないみたいに！

「アフリカより近いところにあるものは全て見えないようである」と表現されるジェリビー夫人は、ポリオプーラ・ガー関係の仕事に追われ、子

供たちが怪我をしてもピーピー (Peepy) がゆくえ不明になって家に戻ってきてても平然としている。キャディ (Caddy) は、母親から無視されているという疎外感を「ママは親としての義務をどうしたの？ きっと社会とアフリカに売り渡しちゃったんでしょ！」(47)と表現する。キャディは、自身が母親にとってペンとインクにすぎない存在であり、結婚すれば、もう二度とアフリカの話を開かされることはない、と自身の本心をエスタに明かす。

ところで、ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-73) が、ハリエット・テイラー (Harriet Taylor) への手紙の中で「*Bleak House* は、ディケンズの作品の中で最悪の作品であり、私の一番嫌いな作品である。この作品には、女性の権利をあざ笑うような下品な無礼さがある。そのあざ笑いは、最も下品なやり方で行われている。それは、下品な男性がかつて学問のある女性を子供や家庭を無視しているとしてあざ笑ったのと同じやり方である」(1854年3月20日)と述べていることを見落としてはならない。

このことにより、ミルがジェリビー夫人の非家庭的側面の強調に不満を持っていることは明らかである。ミルは *The Subjection of Women* (1869) で、才能のある女性が結婚したために天職につくことを妨げられてはならないという自身の考えを強調している。ミルの職業と地位を女性に解放するようにしなければならないという主張は、女性教育の発展という背景を持たないと意味を持たない。

イギリスで女子教育改革の必要性が認識されるのは、メアリー・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97) の死後半世紀近くを経た1840年代の後半である。ミドルクラス女性唯一の職業であるガヴァネスが供給過剰に陥り、質の低下や経済的な困難に直面した。1843年ガヴァネス互恵協会が結成され、1848年にはガヴァネスの質的向上をめざして、ロン

ドン・クイーンズ・カレッジ (Queen's College) が設立された。クイーンズ・カレッジは、ロンドン大学キングズ・カレッジ (King's College) の教授フレデリック・モーリス (Frederick Denison Maurice, 1805-72) を校長として、職業技術よりも女性の人格形成をめざす一般教育を主眼とした中等程度の教育を提供した。その翌年、エリザベス・リード (Elizabeth Reid) が女性が管理運営に参画するベッドフォード・カレッジ (Bedford College) を創設した。二つのカレッジは、女性に自由の精神と真理探究の場を提供し、そこからフェミニストや先進的女性教師を輩出することとなった⁴⁾。

ミルが *The Subjection of Women* で職業と地位を女性に解放するよう主張していることは、女性をめぐるこのような社会的背景から不自然なことでないことは明らかである。それでは、果たしてディケンズは本当に *Bleak House* において女性の権利をあざ笑っているのであろうか？ ミルの見解に対して二つの異論を唱えることができる。

一つの異論は、作品のプロット展開から、ディケンズがジェリビー夫人の非家庭的側面を強調したと考えられることだ。ヒロインであるエスタは、結婚前のデッドロック (Dedlock) 夫人とホードン (Hawdon) 大尉との間に生まれた私生児である。エスタの伯母ミス・バーバリ (Barbary) は、妹の不祥事に怒り、子供を取りあげて引越してしまった。ホードン大尉が死んでしまったと思いこんだデッドロック夫人は、デッドロック卿と結婚する。彼女は、死んでしまったと思いこんでいた自分の子供が生きていることを初めて知る。折しも、エスタは天然痘に倒れる。四つ辻掃除人 (crossing sweeper) のジョーを助けたことから女中のチャーリーがまず天然痘にかかり、チャーリーの看病を続けたエスタにも伝染したのだった。やがてエスタは快方に向かうものの、その病は彼女の顔から美しさを奪ってしまう⁵⁾。

ジェフリー・サーリー (Geoffrey Thurley) は、天然痘をエスタにうつすだけでなくエスタの母親であるデッドロック夫人がエスタの父親であるホードン大尉の墓を訪れる際案内をしたことに注目し、ジョーがエスタと両親の取り成しをしていることを指摘している (Thurley 177)。社会から無視された状態にある子供ジョーは、ひどい状態のスラム街から天然痘を運び、エスタは病気になる。彼女の病気は、彼女のアイデンティティの物語を危機的状况へ追いこむ。ジョーもエスタも、親から無視された犠牲者と言ってもいい存在である。エスタは、ジョーによってもたらされた天然痘により、すっかり変わりはてた顔になってしまう。このことは、単にエスタがスラム街の影響を受けることを示すにとどまらず、作品において重要な意味を持つ。その意味とは、見捨てられた子供のイメージの強調である。このようなプロット展開を考えると、ディケンズが、コンテキスト上母親から見捨てられたような状態にあるエスタを強調するため、ジェリビー夫人の非家庭的側面を強調して描いていると考えられる。ディケンズの作品には、家庭の天使が多く存在し、*Our Mutual Friend* (1865) においても、改心し、ロークスミス (Rokesmith) との駆け落ち結婚の後、ベラ (Bella) が *Complete British Wife* (『完全なる英国の主婦』) という家事ガイドブックを参考にしている。このことから、ディケンズが家庭の天使としての女性の使命を強調し、その考えを支持していることは明らかである。また、ジェリビー夫人の非家庭的側面を強調した方がメイン・プロットにおいて効果的であるということは明らかである。

ところで、デッドロック夫人がエスタが病気の間、気も狂わんばかりだったと心情を吐露することに関し、興味深い天然痘に関する事実がある⁶⁾。それは、18世紀前半から19世紀前半にかけて、家族の中でまた大きなコミュニティにおいて、種痘の普及が親、特に母親に依存していたことだ。コンスタンティノーブル (Constantinople) のイギリス人大使の妻であるメア

リー・ウォートリー・モンタギュ (Mary Wortley Montagu, 1689-1762) は、彼女自身天然痘にかかりながらも生き残った人であり、接種に関する情報を集めることを仕事とした。1718年彼女は、夫の留守中に息子に接種を受けさせた。1721年イングランドに戻った彼女は、外科医に娘の接種を託した。それ以後、彼女は社交界で接種を受けさせるのに重要な役割を果たした (Bennett 500)。また、1799年ロンドン天然痘・種痘病院における牛痘の最初の集団試行には200人の患者が来ていて、そのうち3分の2は7歳以下であり、母親の付き添いがあった (Bennett 503)。1800年7月ヨークシャー州アストウィズ (Astwith) の聡明な女性ワセ (Wase) 夫人は、娘に牛痘を接種した。その牛痘は、隣の村の家具職人によって接種された患者から柳葉刀で夫が持ってきたものであった (Bennett 507)。1808年4月から1810年4月までのセント・パンクラス (St Pancras) のロンドン天然痘病院における3804人の接種は、女性の中心的役割を確かなものだと示している。男性と女性の割合は、49.6パーセントと50.4パーセントであった。しかし、重要な点は、予防接種ずみの人の90パーセント以上は、2歳以下であったことである。サンプルになったのは、家族の一員である年上の子供たちや大人たちであった。そういったサンプルで大人と言えども母親だった (Bennett 511)。このことから、天然痘である娘を放っておくことは、時代背景から考えても母親として失格と言われてもしかたがない。

ミルの見解に対する二つ目の異論は、社会貢献していれば、家庭をないがしろにしてもいいとは言えないという見解である。ここで、第4章のタイトルである「望遠鏡的博愛」(‘Telescopic Philanthropy’) に注目してみたい。望遠鏡にも、地上望遠鏡 (フィールド・スコープ)、天体望遠鏡、双眼鏡などいろいろな種類があるが、天体望遠鏡に関して言えば、望遠鏡が歴史的観点から女性に全く疎遠な物でなかったことを付け加えておきたい。18世紀後半にすでに英国学士院会員ウィリアム・ハーシェル (William

Herschel, 1738-1822) の妹であるキャロライン・ハーシェル (Caroline Herschel, 1750-1848) は、二つの彗星を発見していた。英国学士院会員ウィリアム・ソマーヴィル (William Somerville, 1771-1860) の妻であるメアリー・ソマーヴィル (Mary Somerville, 1780-1872) は、1816年ハーシェル家の望遠鏡を見ている。また英国学士院会員ウィリアム・パーソンズ (William Parsons, 1847-1920) のいとこであるメアリー・ワード (Mary Ward, 1827-69) は、科学的道具の歴史と機能について美しい挿し絵の入った本、すなわち、*The Microscope* を1868年に、そして *The Telescope* を1869年に出版していた。1660年に設立された英国学士院は、1945年まで規則により女性の会員を許可していなかったにもかかわらず、血縁関係により機会を得た女性は、望遠鏡に接する機会がなかったわけではないのだ⁷⁾。

しかし、ディケンズが望遠鏡と女性との関係を示すために「望遠鏡的博愛」という言葉を使ったわけではないことは明らかである。ジェリビー夫人の場合、子供たちへの愛情が欠けていることを示すために、「望遠鏡的博愛」という言葉が用いられている。また、ジェリビー夫人が家事をおろそかにしている様子をキャディは、次のように伝えている。

“As to Pa, he gets what he can, and goes to the office. He never has what you would call a regular breakfast. Priscilla leaves him out of the loaf and some milk, when there is any, over-night. Sometimes there isn't any milk, and sometimes the cat drinks it.” (46)

「パパはね、ありあわせのものを食べてお役所へ行くのよ。世間の人がいう、ちゃんとした朝ご飯を食べたことなんかありゃしないわ。前の晩にパンと牛乳があれば、プリシラが出しっぱなしにしておくの。牛乳のないときもあるし、猫が飲んじゃうときもあるわ」

ジャーランダイス (Jarndyce) 氏にエスタが言う言葉, 「まず自分のお宅の務めをなさるべきだと思います。それを忘れ, おろそかにしているかぎり, たぶん, 他のどんなお仕事をなさってもだめなのではないでしょうか」(64)にディケンズの主張が窺える。すなわち, ディケンズは, 博愛的事業に女性が携わることに反対しているのではなく, 家庭をないがしろにしていることに問題があると言っているのだ。そのように考えるとき, ディケンズによるジェリビー夫人の取り扱いは, エスタの出生をめぐるメイン・プロットに繋がり, 「女性は家庭や子供をないがしろにしていいいわけではない」というメッセージとなる。

結 び

コヴェントリ・パットモア (Coventry Patmore, 1823-96) の *The Angel in the House* (1854-63) やサラ・エリス (Sarah Ellis, 1799-1872) らのコンダクト・ブックに見られる理想的女性像は, 男性優位社会が強いる家庭崇拜主義の産物である。ディケンズは自身の作品の中で男性優位主義に女性が耐え切れない姿を描き出している。*Dombey and Son* と *Hard Times* において, 父親と娘の関係を通してディケンズは家父長制神話が崩壊する様を描き出しているだけでなく, 女性の権利を認めつつも家庭をないがしろにしてはならないとメッセージを伝えている。この当時, 女性の解放を象徴することとして, ブルーマリズムがある。これは, 女性のドレスにおける解放と言ってもいい。きついしめ紐やコルセットから女性を解放したものとして画期的なドレスであった。ディケンズはブルーマリズムを揶揄しながらも, 全般において女性の権利や自由を否定しているわけではない。

ディケンズの自伝的部分から一つの推察をすることができる。かつて父親ジョン・ディケンズ (John Dickens) の借財不払いのため, ディケンズ一家はチャールズ以外マーシャルシー監獄に入った。チャールズは, 少し

前から働いていた靴墨工場で引き続き働くことになった。三ヶ月ほどして一家が監獄を出、チャールズも工場を辞めることになった。父親が工場の経営者と喧嘩したのが原因であった。このとき母親が、せっかく収入になるのだから工場の仕事を続けるようにと主張し、経営者の所へ謝りに行ったことが、チャールズの心に母親に対する深い失望感を抱かせることになった。靴墨工場で野卑な少年たちと一緒に仕事をしなければならなかったことだけでなく、母親から拒絶されたと感じ、彼は屈辱と絶望を感じた。このときの屈辱と絶望は彼の心に生涯トラウマとなって残った。

一方で、ディケンズの身近にアンジェラ・バーデット・クーツ (Angela Burdett-Coutts, 1814-1906) という女性がいたことも忘れてはならないことである。彼女は、母方の祖父トマス・クーツ (Thomas Coutts) から莫大な財産を相続し、慈善事業や寄付に貢献した女性である。ディケンズの運営に関わったユレイニア・コテージ (Urania Cottage) は、彼女によって設立された売春婦の更生施設である。

このことから、ディケンズが社会的な貢献をする女性の重要性を十分認識していたと考えられるが、かつて母親から見捨てられたと感じた経験から、社会的貢献をしているからと言って家庭や子供をないがしろにしてはならない、というメッセージを作品の中で伝えているのかもしれない。

注

* 本稿は、欧米言語文化学会第4回年次大会におけるシンポジウム「ディケンズ生誕200周年を迎えて」(2012年9月2日、於日本大学江古田校舎)での発表原稿に加筆修正を施したものである。

- 1) Charles Dickens, *Dombey and Son* (New York: Oxford UP, 1987), p. 46. この作品からの引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、田辺洋子訳『ドンビー父子』(こびあん書房)を参考にした。

- 2) Charles Dickens, *Hard Times* (New York: Oxford UP, 1991), p. 3. この作品からの引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。
- 3) Charles Dickens, *Bleak House* (New York: Oxford UP, 1991), p. 36. この作品からの引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、青木雄造、小池滋訳『荒涼館』（筑摩書房）を参考にした。
- 4) 1860年代には、エミリー・デイヴィス（Emily Davies, 1830-1921）を中心に女性高等教育運動が開始された。ケンブリッジ大学のガートン・カレッジ（Girton College）は、1869年、エミリー・デイヴィスにより、イギリスで初めて女性のため創設された全寮制のカレッジであった。1865年に発足した学校調査委員会で、女子教育の劣悪さや助教師の質の低さが指摘され、女子教育の改革や高等教育の必要性を支持する声の中流階級を中心に広がった。エリザベス・ギャレット（Elizabeth Garrett, 1836-1917）は、女性初のイギリス国内での医師免許取得者となった。

中等教育では、1871年女性教育全国連合が結成され、その翌年通学制女子学校会社が発足して、男子のグラマー・スクールをモデルとする女子ハイ・スクールが主要都市に設立された。この学校は、19世紀末にはイギリスの全域に普及し、学校数は38校、生徒数は7200人余に及んだ。また、学校調査委員会の勧告に沿った基金立の女子学校も、この時期に80校以上も新設された（香川 206-7）。

- 5) 天然痘は、盲目の最大の原因であり、外観を損なうことがよくあった。あばたは、女性の雇用、特に子供の世話や家の中での奉仕という仕事において有利に働くこともあった。しかし天然痘は、若い女性の結婚の見込みを減らしかねなかった（Bennett 499）。
- 6) 種痘は、エドワード・ジェンナー（Edward Jenner, 1749-1823）によって発明された。ジェンナーは、1775年頃初めて種痘について研究して、牛痘には実は二つ病型があり、その一方だけが人痘失敗例が多いのは、この二型を区別しないためであることを明らかにした。1796年5月14日に、乳しぼりの女の手にできた牛痘の水泡から内溶液を採取し、8歳の少年の腕に接種することに成功した。1798年には有名な「牛痘の原因と効能に関する研究」（‘Inquiry into Cause and Effects of the Variolae Vaccinae’）を発表した。1803年には、種痘を正しく普及させるため、ロンドンにジェンナー協会が創設さ

れた。そして最初の一年半に1万2000人に種痘を行った結果、痘瘡による年間死亡率が2018人から622人に減少した（ギブニー 525）。

- 7) 科学に携わる女性は他にもいた。ジェイン・マルセ（Jane Marcet, 1769-1858）は、英国学士院会員である夫アレグザンダー・マルセ（Alexander Marcet, 1770-1822）の励ましを受け、1806年 *Conversation in Chemistry, in which the elements of that science are familiarly explained and illustrated by Experiment* を出版した。この本は、マイケル・ファラデー（Michael Faraday, 1791-1867）に靈感を与え、科学に導いた。古生物学者であるメアリー・アニング（Mary Anning, 1799-1847）は、プレシオサウルス（plesiosaurus）などの自身の発見を認めさせるのに何年間も格闘した。英国学士院会員チャールズ・リル（Charles Lyell, 1797-1875）のアシスタントであったアラベラ・バックリー（Arabella Buckley）は、経験を用いて若者のための科学の概論 *A Short History of Natural Science, and of the Progress of Discovery From the Time of the Greeks to the Present Day*（1876）を書いた。

作 品

- Charles Dickens. *Bleak House*. New York: Oxford UP, 1991.
———. *Domey and Son*. Oxford: Oxford UP, 1987.
———. *Hard Times*. Oxford: Oxford UP, 1991.

参 考 文 献

- Bennet, Michael. “Jenner’s Ladies: Women and Vaccination against Smallpox in Early Nineteenth-Century Britain”, *History*. Vol. 93. No. 312. Ed. Joseph Smith. Oxford: The Historical Association and Blackwell Publishing, 2008.
Davis, Paul. *Dickens Companion*. Harmondsworth: Penguin Books, 1999.
Dickens, Charles. *Christmas Stories*. New York: Oxford UP, 1992.
Fielding, K. J. *Studying Charles Dickens*. Harlow: York P, 1986.
Hobsbaum, Philip. *A Reader’s Guide to Charles Dickens*. London: Thames and Hudson, 1972.
House, Humphrey. *The Dickens World*. London: Oxford UP, 1961.
Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. Vol. 2. Boston: Little,

- Brown and Company, 1952.
- Learner, Laurence. “An Essay on *Dombey and Son*”, *The Victorians*. Ed. Laurence Learner. London: Methuen & Co., 1978.
- Mill, John Stuart. *The Subjection of Women*. Ed. Stanton Coit. London: Longman, Green, and Co., 1924.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Thurley, Geoffrey. *The Dickens Myth: Its Genesis and Structure*. London: Routledge & Kegan Paul, 1976.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- 香川せつ子, 「女性教育史」, 『西洋の教育の歴史』, 山崎英則 (編著), ミネルヴァ書房, 2010
- ギブニー, フランク・B (編), 『ブリタニカ国際大百科事典 8』, ティビーエス・ブリタニカ, 1994.

Dickens and Gender: The Collapse of the Patriarchal Myth and Dickens's Limited Understanding

YOSHIDA Kazuho

When we consider the works of Charles Dickens (1812-70) from the viewpoint of gender, we can safely state that Dickens represents the collapse of the patriarchal myth but he does not represent the women who assert equal rights of men and women.

In *Dombey and Son* (1848), Dombey's family has a system where the male head of the family has nearly absolute authority and the oldest male child falls heir to his father's property. The father's love and hopes are centered in Paul, Dombey neglects his daughter, Florence, and the estrangement is increased by the death of her brother. The representation of Florence's flight from her father takes the initiative in Dickens's later representations of feminism, but Florence's return is different from the return of Louisa Gradgrind in *Hard Times* (1854), because Florence asks her father to forgive her for her running away from home.

In *Hard Times*, Gradgrind imposes his sense of values of materialism on Louisa, and she gets married to Bounderby to obey her father's will and support her brother. However, she cannot go against her nature and gets out of her life with Bounderby. In both *Dombey and Son* and *Hard Times*, Dickens represents the collapse of the patriarchal myth. It shows his affirmation of women's right, but the two works does not show that Dickens completely approves of women's advances into society. *Bleak House* gives a clue to it.

In *Bleak House*, Mrs. Jellyby neglects her domestic responsibilities because of her mission in Africa. Her telescopic philanthropy causes her neglect of her

family when her young son Peepy gets his head caught in the area railing. John Stuart Mill (1806-73) showed his opinion about *Bleak House* in the letter to Harriet Taylor: '*Hard Times* has the vulgar impudence to ridicule rights of women. It is done in the very vulgarest way—just the style in which vulgar men used to ridicule 'learned ladies' as neglecting their children and household etc.'

Mill's opinion admits of refutation, because it is likely that Dickens emphasizes the bad side of Mrs. Jellyby who neglects domestic responsibilities, in *Bleak House* which shows both the situation of Esther as an orphan and the lack of responsibility of Mrs. Dedlock. Dickens did not deny the right and the conspicuous activity of women. He also knew the usefulness of women who contributed to society.

As the granddaughter of Thomas Coutts, founder of the London bank, Angela Burdett-Coutts (1814-1906) was one of the wealthiest woman in Victorian England. She was one of the busiest as well, not only helping to manage the bank, but also engaging herself very activity in an enormous range of philanthropic project. Urania Cottage, at which fallen women could acquire new skills, was set up with Dickens's assistance.

Although Dickens knew the usefulness of women like Angela Burdett-Coutts, he represented the negative side of Mrs. Jellyby. His representation of Mrs. Jellyby might come from his own experience. Dickens had a bitter experience with his own mother: she was against the plan that he would be released from the blacking factory, and tried to keep him there. Dickens unconsciously reveals his conviction that maternal love is important in his works. In *Bleak House*, the absence of mother has a great influence on Esther's life and Esther feels a deep sense of isolation. Therefore Dickens might have used his past experience with his own mother.